

『眠り姫の憂鬱と』

かつて子供だった守り人たち』

※マイク位置およびSEは実際の収録と微妙に異なっている部分があります。

子供のころに恋焦がれた年上のお姉さんが、ある日突然、決して目を覚まさない眠りについた。

いつか目覚める日を信じていたが、気が付けば二十五年の月日が流れてしまふ。

少女のまま眠り続ける彼女を、このままそばで見守っていければいいと自分を納得させた矢先に、彼女は「別の男の手によって」目覚めを迎える。

献身で覆い隠そうとしていた幼い日の恋心が、歪んでひび割れる音がした。

■キャラ設定

● ヴィスク（本作のヒーロー）

・身長191cm

・体重75キロ前後でやせ型

・一人称 僕

・39歳 当時14歳

孤児院育ち。

まだ十四歳だった二十五年前、年上のヒロインにまつぐな恋心を抱いていたが、ヒロインが二十五年の眠りについてしまったことで徹底的に歪む。

眠り続けるヒロインを、邪悪な大人たちからどうにか守ろうとあがき続けた結果、孤児院の院長にまで上り詰めた。

基本的に穏やかな笑みをたやさない理想的な孤児院の院長先生だが、目を覚ましたヒロインに対してのみ邪悪さを発揮する。

十八歳のころ、眠っているヒロインを犯してしまったことをトラウマレベルで悔いており、女性との性的な接触に嫌悪感があるため、対ヒロイン以外では完全に性的不能。

でも孤児院の院長として、虐待と苦痛に対する知識は豊富すぎるほど豊富。

●ヒロイン

- ・身長155くらい やせ型
- ・17歳

二十五年間眠り続けた夢の少女。

本名は別にあるが、親しい人からは「オーリ」と呼ばれている。

元孤児院の職員で、かつて子供だった四人のヤンデレに執着されている。

日本出身だが、五歳のころにこちらの世界に迷い込む。

十七歳で一度日本への帰還に成功しているが、ヤンデレ共の執着が強すぎて二十五年後に日本から引つ張り戻された。

他人が自分に依存することは許すけど、依存しきった相手にもほかの人々と変わらない接し方をするせいで、「こんなに愛してるのに、どうして愛してくれないんだ」という慟哭を引き出す天才ヤンデレメーカー。

■名前だけ登場

●グロウ 四十歳 当時十五歳

ヒロインを目覚めさせる方法を、方々旅して見つけた冒険者。

昔は手の付けられない悪ガキだったが、間接的にヒロインを眠らせる原因になってしまったことを悔いている。

ヴィスクとは子供のころから犬猿の仲で、お互いがお互いを大嫌い。

●パストル 三十三歳 当時八歳

孤児院出身で、今はヒロインの担当医。

ひどい摂食障害と自傷があるが、すべてヒロインの気を引きたいための行動だという自覚がある。

自分はヒロインに近づかない方がいいと思っているが、「どうしても辛くなったらここに来い」と病院の地図を書いた紙きれをヒロインに渡した。

■トラック1 俺の可愛い眠り姫 3分程度

場所…ヒロインの寝室

まだヴィスクが18歳のころ。眠り続けるヒロインにおとぎ話を読み聞かせている。若い頃なので性格少しやんちゃ気味です。

【マイク位置9】

ヴィスク「昔々、あるところに、決して目を覚まさないお姫様がいました。

お姫様は眠っている間、少しも歳をとらなかったのですが、

周りの人々はどんどん歳を取っていきます。

困った王様は、お触れを出しました。

“姫を目覚めさせた者に、姫との結婚を許す”と。

国中の男たちが、お姫様を目覚めさせようと大騒ぎしました。

それでもお姫様は目覚めません。

ですが、ある素直な心をもった青年が、

真実の愛をもってお姫様に口づけをする——」

【朗読中断、溜息つく】

SE 本を閉じる音

ヴィスク

「真実の愛って、なんなんだろうな。

俺の気持ちじゃ真実の愛じゃないから、

オーリも目を覚ましてくれねえの？

それとも、素直な心を持ってないから？ ね、どっち？」

SE 粗末な木製の椅子が軋む音

【マイク位置11】

ヴィスク「……綺麗な寝顔。なあ、気づいてるか？

オーリが眠って、今日でちょうど四年になる。

俺、十八歳になったよ。背もぐっと伸びて、男らしくなったんだ。

もし今、オーリが目を覚ましたら、

きっとビックリするだろうなあ。

だって四年も眠ってる間に、十四歳だった俺の方が、

十七歳のオーリより年上になっちまってるんだから。

今年の花葬祭でさ、何人かの女の子に、

花を贈ってくれて言われてるんだ。

そう、デートのお誘いってやつ。

【マイク位置3 耳元で】

ヴィスク「どう？ やきもちで目、覚まさない？」

【マイク位置11 離れながら自嘲気味に笑う】

ヴィスク「心配しなくても、俺は君以外に花を贈ったりしないよ。

なあ、約束、覚えてる？

俺が孤児院を出てもオーリの事を好きなままで、

花葬祭の日に花を贈りに来たら……俺とのこと、

真面目に考えてくれるって言ったの。

俺のこと、孤児院の子供の一人じゃなくて、

男として見てくれるって言ったの。

俺、孤児院の職員になったんだ。

もっとオーリのそばにいたくてさ。

これからは、夜もずっと一緒にいるよ。

そうすればオーリも怖くないし、寂しくないだろう？

俺が守るよ、君のこと。ずっとそばで待ってるから」

【マイク位置3 耳元で】

ヴィスク「早く目を覚ませよな、俺のかわいい眠り姫」【頬にキスする】

■トラック2 過ちの夜 10〜15分程度

場所…ヒロインの寝室 夜

命じられた仕事を終えてヴィスクがオーリの部屋に戻ってくると、複数の男たちがオーリの服を脱がせようとしているところだった。

SE 遠くから歩いてくる音

SE ストップ

SE 走る音

SE 勢いよくドアを開け、ヴィスクが飛び込んでくる

【マイク位置9】

【ヒロインの服を脱がせようとしてる連中を見つける】

ヴィスク「何してるんだ、お前ら!!? オーリから離れろ! 今すぐ!

出ていけ! 殺されたくないや今すぐ失せろ!」

SE 逃げ去る音

SE ドアを閉める

ヴィスク「はぁ……はぁ……ッ——オーリ!」

SE 駆け寄る音

【マイク位置9】

【ヒロインに駆け寄る】

ヴィスク「大丈夫だったか？ 変なところ触られなかったか？

ごめん、俺がそばを離れたから……！！

くそ、あいつら……！！ 俺にしか頼めない仕事があるとか言って、

君にイタズラするために、俺を追い払ったんだ……！！

怖かったよな？ 気持ち悪かったよな？

今、体拭いてやるから。服も新しいのに変えような？」

【自分に言い聞かせるように】

ヴィスク「大丈夫……大丈夫だ……大丈夫……」

【努めて明るく】

ヴィスク「なあ、そうだ！ 今日には花葬祭だって気づいてたか？

みんな、今年こそ恋人を作るんだって、浮足立っててさ。

俺も、何人かの女の子に花を贈ってくれて言われてて……

ああ、前にしたつけ、この話。

ええと……ごめん。なんか、言葉が上手く出てこなくて……」

【深呼吸】

ヴィスク「すうーはあ……うん、もう大丈夫。ほんと、ごめんな。

いつもなら、あんな連中に騙されたりしないのに」

ただの言い訳なんだけど、今日は花葬祭だから……その……」

【言いよどむような溜息】

ヴィスク「花を買いに行ってたんだ。オーリに贈ろうと、思ってた……」

SE 花束がさがさ

ヴィスク「これ、花瓶に飾っておくよ。

俺がオーリに花を贈ったって、みんなに分かるように。

そうすればさっきみたいなやつらも、

きつとオーリに近づかなくなる。近づかせないよ。絶対に」

【マイク位置1】

ヴィスク「でも……そうだな……ん……正直、少し疲れた……。

オーリのそばを離れたくないのに、

みんな理由を見つけて、俺を追い払おうとするんだ。

逆らったら首になるし……そしたらオーリを守れない。

でもそばを離れたら、さっきみたいな連中が、オーリのこと……」

ヴィスク「だから……そろそろ、目、覚ましてくれよ。」

いつまでも、こんな意地悪してないでさ。

俺に返事するのが嫌？ だから目を覚まさないの？」

【少しおどけるように】

ヴィスク「俺のことなんて、別に振ってくれていいんだ！

それでもいいから……頼むから……

【だんだん深刻に】なんでもいいから、何か……一言だけでも、俺に答えてくれよ」

SE 衣擦れ

SE ベッドが軋む

【マイク位置1】

ヴィスク「なあ……キス、していいか？ 唇に。」

嫌？ ——だよな。

でも本当に嫌なら、ちゃんと目を覚まして、そう言って。

起きないなら……キス、しちまうからな。

キスした後に飛び起きても、やめてやらないから」

【唇に触れるだけのキスから、だんだん深いキスへ】

ヴィスク「唇、やわらかい……あつたかくて……気持ちいい。

まだ起きない？ キスだけじゃ足りないか……【ここまでいい感

じにキスしながらしゃべる】」

ヴィスク「じゃあ、もっとひどい事、しないとな」

【ヒロインのブラウスのボタンに手をかける。自己嫌悪と不安と恐怖と興奮

で口の中が渴いて呼吸は荒い】

ヴィスク「起きて抵抗しないと、服、全部脱がしちまうからな。

そりゃ、着替えとか、体拭いたりとかで、

裸は何回も見てるけど……わかるだろ？

これはいつもと違うって」

SE 衣擦れ

SE ベッドのきしみギシギシ

ヴィスク「ああ……ほら。全部脱がしちゃった。」

【一呼吸】綺麗だ……俺以外のやつがこの体を見たり、触ったりするの、絶対に我慢できない。

さっきのやつら……絶対に許さない……絶対に。

この人は俺のだ……俺だけの……！」

【ヒロインの体にキスしながらしゃべる。適宜いい感じで】

ヴィスク「なあ、オーリ。何も感じない？ ごめん、はじめてだから、上手くできなくて……でも、痛くしないようにするから。

ほら、胸もこうやって……舐めたら気持ちよくなれるだろ？」

【一分ほどヒロインの胸を舐める。若い欲望溢れる感じで激しめに】

ヴィスク「はあ……はあ。どう？ 気持ちいい？

じゃあ……足、広げような……こっちもちゃんと、触ってやるから」

【ヒロインの秘所に触れるが、濡れてないことに困惑する】

ヴィスク「あれ……？ なんで？ 濡れてない……よな、これ。

寝てるから？ それとも、俺が嫌だから……？

なあ、俺、どうしたらいい？ ——舐めてほしい？

ここ、舐めてもらうと、気持ちいいんだろ？

そうしたら、目、覚ますかな？

目を覚まして、俺がしてることに驚いて、怒って、泣いて……

俺の事、嫌いになるかな？」

ヴィスク「それでもいい。それでもいいから、そろそろ起きてよ」

【マイク位置 やや下から】

【ヒロインの秘所を舐めながらしゃべる】

ヴィスク「はあ、起きて……ちゅ、はあ……んん……起きてオーリ……

お願いだ。起きて、俺を止めて。じゃないと、俺、本当に……！

ん、じゅる……はあ……はあ……。【舐めるの……ここまで】

ヴィスク「くそ……ぜんぜん濡れない……なあ、どうしてほしいのか、

ちゃんと口で言ってくれないと分かんねえよ……。

こんなんじや、オーリも痛いだろ？

だってこれじゃ……足りない……よな？ 俺のツバだけじゃ……」

【あ、そうだ。と何か思いついた感じの吐息】

SE 引き出し開ける

SE 瓶のふた開ける

ヴィスク 「ほら……香油の香り、わかるか？」

とろっとしてて、いつもオーリの肌に塗りこんでるやつ。

この香り、好きだったろ？ これを、さ……ほら、

こうして塗り込んだら……」

SE 水音

ヴィスク 「な……？ 指、すんなり入るようになった。

まだ、痛いかな？ もう平気？ 【少し笑って】 我慢強いな、

オーリは。【一転して失望】「ここまでされても、
起きないなんてさ……」。

【低く呟く】

ヴィスク 【これなら俺も、君の中に……。】

SE ベッド軋む

【マイク位置7】

【耳元で、耳にキスしたり耳たぶ噛んだりしながら】

ヴィスク 「なあ、ほら……早く目え覚まさないとか、ほんとに入れちまうぞ？

わかるかな？ もう、入り口にあたってる。

こんなの嫌だろ？ だから抵抗して……叫んで。

俺が嫌いだって言ってくれ。そうしたら、やめるから」

ヴィスク 「叱ってくれよ、昔みたいに。

そうしたら、ちゃんと言う事きくから……！

はぁ……はぁ……はぁー。【落胆の溜息】」

【マイク位置9】

ヴィスク 「わかったよ……ほんと、意地っ張りだよな、昔から。

いれるからな……ほんとに……オーリが悪いんだからな。

オーリが、ちゃんと抵抗しないから……だから……！」

SE 水音

【マイク位置7】

【歯を食いしばるようにしてヒロインの中に押し入る】

ヴィスク「っ……う、ああ……！　っは、きつつ……くそ……

ああ、くそ……ごめん、これ、オーリも痛いよな……？
すぐ終わるから、ちよっと我慢して……はあ、はあ、はあ……
好きだ、好き……愛してる、ほんとに、ほんとに愛してる……！」

SE 激しく出し入れする音

【一分少々、泣きながら耳元で荒い呼吸。声は抑えめで吐息強めの方向で。
よきタイミングで苦しそうにフィニッシュ。なお外出し】

ヴィスク「う、あ……いく、いきそ……いく、あ……ああ……！

はあ……はあ……はあ……」

【マイク位置9】

【しばし呼吸を整え、眠ったまま精液で汚れてる思い人の姿を、賢者モード
で見てザッと血の気が引く】

ヴィスク「あ……ああ……！

なんで、こんな……俺、こんなつもりじゃ……！

これじゃ、あいつらと同じじゃないか……！

ごめん、今、綺麗にするから……！」

SE 衣擦れがさこそ

ヴィスク「ごめん、ごめん……許して、ごめん……

ごめんなさい……ごめんなさい……

【謝罪フェードアウトしたのでちよっと長めに繰り返す】

■トラック3 僕が必ず護るから 3分程度

場所…ヒロインの寝室

トラック2からさらに21年が経過。

別の男の手で目覚めたヒロインが病院での検査を終え、孤児院に戻ってきた
日の夜に、ヒロインの様子を見にくる。

【独白のため通常マイク】

SE 柱時計の音ずっと流す

【時間経過を説明する独白】

ヴィスク「――結局、君は眠り始めてから二十五年もの間、

目を覚ますことはありませんでした。

君を穢してしまったあの日から、僕はずっと怖かった。

君が目覚まして、僕を罵る日が来るのが。

だから君は目を覚まさないのかもしれない。

僕が君の目覚めを望んでいないから。

そんな風に思ったこともある。――でも、違った。

違ったんです。

君にはただ、僕の声なんか、聞こえていないだけだった。」

SE ストップ

SE ドアの音

SE 近づいてくる足音

SE 椅子がきしむ音

【マイク位置1】

ヴィスク「……よく眠ってる。

正直、まだ信じられません。信じたくないのかも。

僕以外の男が、君を目覚めさせただなんて……」

ヴィスク 【溜息】 明日の朝、君は普通に目を覚まして、

止まっていた時を、また歩み始めることになる。

戸惑うことばかりでしょうね。何もかもが、昔とは違っていて。

きつと君は僕に会っても、僕が誰なのかすぐには

分からないでしょう。随分歳を取ってしまった。

もう僕は、君の隣には相応しくない」

ヴィスク 【独り言ちる】……本当に、どうしてこんなことに……僕はもう、

君は一生目を覚まさないんだと思って……それでもいいと、

やっと諦められたのに……」

ヴィスク 【自嘲気味に】 結局、君とつての王子様は、僕ではなかった。

だけどよりによって、グロウを王子様を選ぶなんて……。

ねえオーリ。あいつが子供の頃、どれほど手の付けられない

悪ガキだったか、覚えてないんですか？

大人になったあいつが、どれほどまともに見えたって、

その本質は変わらない。

あいつは君を養子にする気だそうです。

――でも、僕は信じてません」

ヴィスク「あいつは君を僕のところから連れ去って、

自分の思うように凌辱する気だ。

あいつが君を見る、あの目……！

わかりますよ、長い付き合いだ。【吐き捨てるように】」

【優しく、安心させるように】

ヴィスク「でも、心配しないで。僕がそんなことさせません。

僕が君を守ります。今まで通り、これからも」

SE 衣擦れ

SE 椅子が軋む音

【マイク位置3 耳元で】

ヴィスク「君にとって僕が王子様でなくても、僕にとっては、

君が……君だけが、たった一人のお姫様だから【頬にキス】

SE 椅子がきしむ音

SE 遠ざかる足音

SE ドアの音

■トラック4 目覚めの朝（13分〜15分）

トラック3の翌朝。ヒロインの部屋。

ヒロインがはつきりと目を覚ましたと報せを受けて、初めてまともにヒロインに挨拶にくるヴィスク。

SE ノック

SE ドアの音

【マイク位置9】

ヴィスク「おはようございます。

お医者様から、目を覚ましたと聞いたので様子を見て……

今、少し話せますか？ 僕はこの孤児院の院長で――

【顔を見た途端、駆け寄ってくるヒロインにたじろぐ】

――つとと！」

ヴィスク「驚いたな……僕が分かるんですか？

君が眠ってから、もう25年です。

ただの知らないオジサンにしか見えないでしょう？」

【ヒロイン「分かるよ、ちゃんと。でも、眼鏡はちょっと意外かも」】

ヴィスク「ああ……30代で急に視力が落ちたんですよ。

僕が眼鏡なんてイメージと合わないって、

パストルにも随分皮肉られました。

覚えてますか？ 絶対に笑わない、図書室の幽霊。

いつも君の膝の上で本を読んでもらっていた、

あの小さいパストルです」

【ヒロイン「忘れるはずないよ」】

ヴィスク「よかった。もし君に忘れられてたら、

あいつはきっと立ち直れないでしょうから。

医者になったんですよ、あいつ。

いつか自分がオーリを目覚めさせるんだって言って、

グロウに先を越された形になって、

かなりイラついてましたが……」

ヴィスク「目覚めてから昨日までの数日間、

君はパストルの病院に入院してたんです。

目覚めた直後の君は少し不安定で、

まだ夢うつつと言う感じでしたから」

ヴィスク「こうしてはつきり目を覚ました今、君の担当医は、

孤児院と契約しているおじいさんに変わりますけど。

——嫌ですか？

【少し探るように】「これからも、パストルに診てほしい？」

【ヒロイン「ううん。誰でも大丈夫」】

ヴィスク「よかった……パストルも、今や町で一番大きな病院の

院長ですからね。

中々気軽に診察を頼める立場じゃないんです。

もちろんあいつは、ずっと君の健康状態を

確認したくてしかたがないでしょうけど。

パストルのところには、今度改めて顔を見せるとして——

おいで、今の孤児院を案内します」

SE 足音

SE ドア開閉

【マイク位置 11】

ヴィスク「ふうん……それじゃ君は、二十五年間、夢の世界で生きていた記憶があるんですね。もちろん信じますよ。眠ったまま食事もせず、成長もしなかった君が、夢の中でどんな不思議な体験をしていても、何もおかしくはありません」

ヴィスク「それじゃあ、この孤児院は随分懐かしく感じるでしょう。なにせ、二十五年ぶりだ。昔に比べて、随分活気があるでしょう？ 子供の数も職員の数も、当時の倍以上に増えてますからね」

【ヒロイン「ヴィスクが院長になったんだよね？」】

ヴィスク「そう、驚くべきことに、今は僕が院長です。僕は18歳でこの職員になったんですけど……下っ端としてあれこれ雑用を引き受けてるうちに、いつの間にか」

【ヒロイン「そうだったん……ですね……？」】

ヴィスク「うん？ どうしたんですか、急に敬語なんて——ああ、僕が敬語だからか。いいんですよ、オーリは昔のままで。僕の敬語は、ほとんどクセみたいなものですから」

【ヒロイン「昔はよくイタズラとかしてたのにね」】

ヴィスク「ん、ぐ……！ ちょっと、オーリ……職員や子供たちの前で、僕の昔のイタズラとかを暴露するのは無しですよ……？ 何をニヤニヤしてるんですか……！ 今は子供たちのイタズラを叱る立場なんですから、本当にダメですからね！？」

【ヒロイン「ヴィスクって昔から、ちょっと大人ぶるところあるよね」】

ヴィスク「大人ぶっているわけではなく、立场上威厳を保つ必要が……」

【気を取り直して】ダメですよ、そんな風にからかつて。今は君より、僕の方が随分大人なんですから。あんまりお痛が過ぎるようだ——」

SE 衣擦れ

【マイク位置3 耳元で】

ヴィスク「たとえ君でも、少しお仕置きをしなければ」

【マイク位置9】

ヴィスク「つはは……！」

冗談ですよ。でも、中々迫力があるでしょう？心配しなくても、僕が子供たちに鞭をふるったことは、今まで一度もありません」

ヴィスク「なのに子供たちの間では、〃院長先生の鞭は

めちやくちや痛い〃という噂が、まことしやかにささやかれている。そうですね……君がその噂の最初の体験者にならないことを祈っていますよ。心から。【楽しそうに】」

【ヒロイン「ヴィスク、ちょっと性格悪くない？」】

ヴィスク「僕は昔からこういう性格です。

子供たちや職員には内緒にしていますけど、君にはもう、どうせ全部知られてますから。

——さて、そろそろ部屋に戻りましょうか。

何か欲しいものがあつたら、

あとで部屋に届けさせますが——

何もない？ 本当に？

なんでもいいんですよ、ほら、例えば何か甘い物とか……」

【ヒロイン「じゃあ、仕事が欲しいかも」】

ヴィスク「——は？ 仕事！？ ああ、いえ……」

その姿勢は素晴らしいと思いますけど、院でお願いできる仕事は、子供たちの遊び相手とか掃除とか、その程度の事で……」

【ヒロイン】「そういうのじゃなくて、生活のためにちゃんと働きたいの!」

ヴィスク「生活のためって……孤児院の外で働くってことですか……? お金のために? そんな危ないこと、とても許可できません!」

【ヒロイン】「許可って……仕事をするのに、ヴィスクの許可がいるの?」

ヴィスク「そんな顔をしないでください。

意地悪で言ってるわけじゃないんです。

君は数日前まで昏睡状態だったんですよ? 大丈夫。

焦って仕事をしなくても、突然君を放り出したりしません。

ここは居場所のない子供たちの帰る家です。

だから安心して、僕を頼って!」

【ヒロイン】「十七歳は子供じゃないと思うけど……

ごめん、仕事を紹介してほしいなんて、図々しかったよね。

ちゃんと自分で仕事を探してみる!」

ヴィスク「オーリ、そうじゃありません。仕事の紹介が面倒だとか、

そういう理由で許可を出さないわけじゃないんです。

十七歳は子供じゃないかもしれませんが、僕から見れば、

十分に守られるべき子供なんです。とても放ってはおけない。

一年くらいは孤児院で生活して、仕事や住む場所は

もつとゆつくり見つけて行けば……!」

【ヒロイン、適当に聞きながして立ち去ろうとする】

ヴィスク「焦って!」オーリ、待ちなさい。僕の話をちゃんと聞くんた。

【叱りつけるように】オーリ!」

SE もみ合う

SE 壁ドン

【マイク位置3】

【溜息をついたのち、耳元で】

ヴィスク「すみません、急に大きい声を出して。

僕みたいな長身の男に、こんなふうに壁におさえつけられたら、

女の子の君はきつとひどく怖いでしょう!」

ヴィスク「——でも、君がこうさせた【少し責めるように】。

僕はずっと……目を覚まさない君を、ずっと守ってきた。

なのに、目が覚めたたん、どこかに、行こうとするなんて……」

【ヒロイン「わ、分かったから！ 耳元で喋らないで……！」】

ヴィスク「うん？ 耳元で話されるの、嫌ですか？」

【息拭きかける】

ヴィスク「はは……びくってなって、かわいいな。

ふうん……こんな反応、するんですね。

耳、昔から弱いんですって？ 覚えてないな……

もう随分昔のことだから。息を吹きかけるだけでそんなんじや、もし舐めたりしたら、どんな風になるのかな？

少し、いたずらしてみましようか……」

SE もがく

ヴィスク「しい、しー。ほら、暴れないで。いい子だから。

君が悪いんです。僕の話聞かずに、逃げようとするから。

そんなに聞き分けの悪い耳には、少しお仕置が必要ですね」

【1分ほど耳たぶかんだり耳舐めながら】

ヴィスク「くすぐったい？ いや？」

【耳にキスしながら】

ヴィスク「そんなに可愛い声を出したら、通りかかった職員に怪しまれる。

……声、我慢できませんか？ お仕置きのなに、

まさか感じてるんじやありませんよね？【キスここまで】

ヴィスク「ああ、ダメですよ。そんなに唇を噛み締めて。

こんなに赤くなつて、血が出そうだ。……オーリ？」

【ヒロイン、唇を噛み締めたまま泣く。我に返るヴィスク】

【マイク位置9】

ヴィスク「あ……す、すみません、やりすぎました！

困ったな……泣くほど嫌でしたか？

分かってます。孤児院の院長が、こんなことすべきじゃなかった。

こんな……どうして……

なんて謝ったらいいか……ッ【突き飛ばされる】

SE 突き飛ばし、走り去る

ヴィスク「オーリ！【焦って追おうとして立ち止まる】」

【溜息】

【独白のため通常マイク】

ヴィスク「くそ……何をしてるんだ僕は……」

こんなことがしたいわけじゃ、ないはずなのに……」

■トラック5 僕を許してくれますか？（4分程度）

場所…ヒロインの部屋

トラック4の数分後、怖がらせたことをオーリに謝りに来るヴィスク。
しかしヒロインはすでに孤児院を飛び出すために旅支度を始めている。

SE 引き出しガサゴン

SE 近づいてくる足音

SE ノック

【マイク位置9】

【ドア越しに】

ヴィスク「オーリ、少し話せますか」

SE ドア開く

ヴィスク「さっきの事を謝りに——何をしてるんですか？

まさか、荷物をまとめてるわけじゃないですよね？」

【ヒロインが荷物をカバンに詰め込んでいるのを見て、咎めるように】

ヴィスク「出ていったとして……どこに行く気です？」

【ヒロイン「ヴィスクには関係ないでしょ」】

ヴィスク「関係ないはずないでしょう。

僕は君の——【言いよどみ、舌打ち】。

とにかく、少し落ち着いて、話し合いましょう。

僕の先ほどの振る舞いについて、君が腹を立てるのは分かります。
だけど、衝動的にここを出ていったって、行き場所なんて——」

【ヴィスク、ヒロインが持っている地図に気づく】

ヴィスク「その、地図は……？」

手書きですね……いつ、誰から受け取ったんです？」

【ヒロイン「パストルがくれたの。朝、ヴィスクが来る前に」】

ヴィスク「パストルから？ あいつ……ここに来たんですか!？」

あいつ、担当医を変えることに合意してたくせに、今更……」

【深いため息】

ヴィスク「その地図をこっちへ。渡しなさい、早く」

【ヒロイン「どうして？」】

ヴィスク「さっきは詳しく説明しましたが、

パストルはまともじゃない。優秀な医者ではありますが、精神的にひどく不安定なんです。君に何をするかわからない。

——そうです、僕以上に。あいつ自身も、それを理解している。だからあいつは君を退院させて、僕のところへ預けたんです。

その地図を渡された時、パストルになんと言われました？」

“どうしようもなくなったら頼れ”と、そう言われたのでは？」

【沈黙するヒロイン】

ヴィスク「よく考えて。本当に今が、どうしようもなくなった時ですか？」

もう僕を許せない？」

【ヒロイン「そこまでじゃ……ないけど……」】

【少しホッとして】

ヴィスク「よかった。せつかく目を覚ました君を、こんな風に失うなんて、

僕には耐えられません。

ああ……いいですよ、その地図は君が持っているといい。

大丈夫、取り上げたりしません。さっきは少し取り乱して……

まいったな。君といると、穏やかな孤児院の院長先生で

いられなくなってしまう。

僕と、仲直りしてくれますか？」

昔みたいに、やんちゃな僕を許してくれる？」

【ヒロイン、無言でうなづく】

ヴィスク「ありがとう。」

それじゃあ……また、夕食で会いましょう。

今夜は君の好物ばかりです。うん？ まあちよつと、

職権乱用を——ね？

ふふ……皆には内緒ですよ」

■トラック6 君をどこにも行かせない（6分程度）

院長室に呼びつけられたヒロイン。

昨晚、図書室で誰かと会っていたらうと、ヴィスクに詰め寄られる。

S E ノック

【ドア越しに】

ヴィスク「どうぞ、入って」

S E ドアの開閉

S E 椅子がギリ

【マイク位置9】

ヴィスク「それで……どうして院長室に呼ばれたのか、

分かってますか？

そう——昨晚、君が図書室にいた件です。

夜中、トイレに起きた子供たちから報告があつたんですよ。

君が図書室で誰かと話していたと。

僕に何か言うことはありませんか？」

【ヒロイン「本を読んだら、つい声が出ちゃってただけで、別に誰とも話してない」】

ヴィスク「なるほど、つまり君の朗読を聞いた子供たちが、

誰かと話していると思ひ込んでしまった、と。

それじゃあ、何を読んでいたか教えてもらっても？

夜中に部屋を抜け出して、暗い図書室で蠟燭をたよりに、

つい声を出して読んでしまうほど、

君が気に入っている本だ。僕も是非読んでみたい」

【ヒロイン「眠り姫のおとぎ話だけ……」】

ヴィスク「ああ、あの本。僕も大好きな本だ。

眠っている君のそばで、よく読み聞かせていました。
全て暗記してしまうくらい、何度も、何度も」

SE 椅子が軋む

SE 近づく足音

ヴィスク「だけど僕が知っている眠り姫のおとぎ話には、
こんなセリフは出てこないんです」

【マイク位置7 耳元で】

ヴィスク「〃オーリ。本当のところを言うと、
私はあなたをさらいにきたんだ」なんてね」

SE 衣擦れ

SE 壁ドン

ヴィスク「しい、怖がらないで。大丈夫、怒ってません。

浅はかな子供の嘘に目くじらを立てるほど、

僕は心の狭い大人じゃない。

グロウが図書室にきたんですね？

君をここから連れて行くために」

【全体的に、悔るように】

ヴィスク「あいつは君を二十五年の眠りから目覚めさせて、

自分が君の王子様だと信じてる。

若いお嬢さんの目から見て、あいつはどんなふうに映りました？

輝く金色の髪に、鍛え上げた体と、

洗練された立ち居振る舞い。

——そのままさらわれてしまいたいと思った？

ああ……だけど、君はそれを拒絶して、ここに残った。

僕はそれが嬉しいんです」

【少し離れる】【トーン落として】

ヴィスク「でも……できるだけ早く孤児院を出た方がいい——と

思われているのは、少し、傷つきました。

怒っているんですか？ 昨日、君を怖がらせたことを。

仲直りをしてくれると言ったのは嘘だった？」

【ヒロイン「全部聞いてたの……？」】

【含み笑い】

ヴィスク「本当はね、昨日は、僕が宿直の当番だったんですよ。

男と密会してるというのに、君はあまりに無警戒で……。

それとも、わざと僕に気づかせた？ 僕に見せつけるために？」

【ヒロイン「違う、そんなんじゃない……！！」】

【落胆】

ヴィスク「そう……違うんですね。

そうならいいと思っていたのに……。

君は本当に、僕にすべてを隠しておくつもりだったわけだ。

パストルが地図を渡したことを黙っていたように、

グロウが会いに来たことも、

僕に打ち明けるつもりはなかったと」

ヴィスク「どうして僕に隠し事をするんです？

そんなに孤児院で過ごすのが嫌ですか？

それとも、逃げ出すほど僕が嫌？

これじゃもう、君を閉じ込めるしかないじゃないか……」

【ヒロイン「閉じ込めるって……部屋に鍵をかけるの？」】

【マイク位置11】

ヴィスク「仕方がないんです。

仕方がないんだ……【自分に言い聞かせるように】」

【ヒロイン「嫌！ 放して！」】

SE もがく

【暴れるヒロインを倉庫まで引っ張っていきながら】

ヴィスク「ほんの2、3日の辛抱です。

君がちゃんと落ち着いて僕の話聞けるようになったら、

また出してあげますから。

退屈しないように、本の持ち込みも許可します。

いい子だから、聞き分けてください」

SE 足音

SE ドア開閉

SE 鍵

SE ドンドンドン！

【マイク位置9】

【ドア越しに】

ヴィスク「大騒ぎしないで。子供たちが怖がります」

SE ストップ

ヴィスク「そう……いい子ですね。

大丈夫、君がちゃんと反省してくれれば、
すぐに出してあげられますから。

わかってくれますよね？

これは全部、君を守るためなんだって。」

SE 遠ざかる足音

■トラック6 ドールハウスへようこそ（4分程度）

窓から抜け出して孤児院からの脱走を図るヒロイン。

パストルにもらった地図に従って夜の旧市街を走り、たどり着いた
家の戸をノックすると、地図をすり替えたヴィスクが現れる。

SE しばし走る

SE ストップ

SE 数歩歩く

SE 重めのドアのノックノック

SE ドア開く

【マイク位置9】

ヴィスク「【嬉しそうに】はい、ようこそ僕の家へ。

こんな夜分に孤児院を抜け出して、
男の家に遊びに来るなんて……君は本当に悪い子ですねえ」

SE 後ずさりズザッ

ヴィスク「あつはは……！ その顔……！！

パストルの地図を頼りにここに来たのに、
どうしてヴィスクが——って思ってます？

地図、すり替えておいたんですよ。気づきませんでした？」

【逃げ出そうとするヒロイン。その腕を掴んで引き寄せるヴィスク。
ヒロインを背後から羽交い絞めにする】

【マイク位置7】

ヴィスク「おっと……！ ああほら、暴れない、暴れない。

大声を出す？ 誰か助けてって叫びますか？

いいですよ、やってごらん。

だけど……どうでしょうねえ？ 僕は孤児院の院長で、

君はそこから抜け出してきた女の子だ。

“この子は精神的にひどく不安定だから、

一度家で預かることにした”と僕が言えば、

みんなそれを信じます。もちろん、孤児院の職員たちも」

ヴィスク「それに……ここに来るまでの道のりで、

気づきませんでしたか？ この一帯は治安が良くない。

悲鳴を上げて逃げ出した女の子を助けようとする

良き隣人より、自分こそが獲物を得ようとする

ケダモノの方がはるかに多い。

もしそんな連中に捕まったら——」

【耳元で】

ヴィスク「どんなひどい目にあわされるのか、想像ができますか？」

SE もがく

ヴィスク「しい、しい……ほら、静かに。いい子だから。

わかりませんか？

今、君が僕の手を振り払って逃げ出したら、

怖いことが起こるって、教えてあげてる

つもりなんですけどねえ。

どうして君みたいな無力な女の子が、

地図を片手に夜の旧市街を歩き回って、

誰にも襲われずにここまで来られたと思います？

地図をすり替えておいた僕が、

君に見張りをつけていなかったと思いますか？

そしてその見張りに、どういう依頼を出していたか、

想像が付きませんか？」

SE 振り払う

【ヒロイン「そんなの分からないし、分かりたくない！」】

【正面からヒロインと向き合う】

【マイク位置 9】

ヴィスク「そう……純粋な君には、想像もできないかもしれませんね。

だけど僕は君とは違う。十四歳だったころの、

無垢でまっすぐな少年ではなくなってしまった。

君がもし、僕のところから逃げ出したら、

さらって、閉じ込めて、僕に救い出してもらうことを

心から願うように苦しめろって――

そういう依頼をすることに、何の良心の呵責もないんですよ」

【ヒロイン、怯え切った目をヴィスクに向ける。その視線に、言い知れぬ喜びを感じるヴィスク】

ヴィスク「その目……ああ、その目だ。

僕を拒絶する、その目。夢に見ていた通りだ」

SE 抱きしめる

ヴィスク「僕が怖い？ 呪わしい？ 汚らわしくて耐えられない？

大丈夫、ちゃんと分かせてあげますから。

僕がどれほど君を愛しているか。

やっとな手に入った……僕のかわいい眠り姫。

これからずっと一緒にいましょうね？」

■トラック7 摘まれたアザミ（15分くらい）

ヴィスクの家。リビングの床に転がっているヒロイン。

四肢の感覚は薬によって失われている。

SE ドア開閉

SE 近づいてくる足音

【マイク位置 16】

ヴィスク「ただいま、オーリ。

大人しく待って――は、いられなかったみたいですね」

【笑いながら溜息】

【マイク位置 16 ↓ 7】

ヴィスク「説明したでしょう？ 薬で手足の感覚を麻痺させるから、

下手に動き回ろうとすると怪我をするって。

いったいいつから床に？ 僕が家を出てすぐ？

まったく——【床に転がっているヒロインを抱き上げる】。

世話の焼けるお姫様だ」

S E 抱き上げる衣擦れ

S E ソファに座らせる

【マイク位置 9】

ヴィスク「逃げ出そうとするに当たって、

もう少し僕を信頼させてから、隙を見て——とか、

考えなかったんですか？

もう一度、君は自分がどういう状態にあるのか

確認すべきだ。

ほら、ソファから下りようとしてみるといい。

見ていてあげますから」

S E ガサゴソ

ヴィスク「——分かるでしょう？

今、君が動かせるのは、肘から上と、膝から上だけだ。

だから床に下りても、這って動くこともできない。

僕としても、正直ここまでではしたくないんです。

この家の中で自由にふるまってほしい。

だけど、君には過去に脱走の実績がありますからね」

【ヒロイン「もう逃げ出さないから、手足をもとに戻して！」】

ヴィスク「そうですね……。では、こうしましょう。

今から僕が言うことに、ちゃんと全て従ってくれたら、

君を信じてみてもいい。

だけど、もし言う通りにできなかったら、

お仕置きをしなければ」

S E 歩く

S E 戸だな開閉

ヴィスク「これが何だかわかりますね？」

SE 教鞭の音

ヴィスク「孤児院であまりにも使い道がないものだから、先代院長から引き継いだ切り、家にしまえばなしかったですよ。もちろん君も、孤児院の子供たちと同じように、僕にこれを使わせたりはしませんね？【楽し気】」

ヴィスク「さて……それじゃあ最初の指示を出しましょうか。口を開けて、舌を出して」

【ヒロイン「え？　なんで……？」】

SE 教鞭の音

ヴィスク「質問は許可していませんよ。今のは特別に許しますが、次に勝手に質問をしたら、僕は君を鞭で打たなければならなくなる。どうか、僕にそんなことをさないでください。もう一度言います。口を開けて、舌を出して」

【従うヒロインに、満足げにうなづくヴィスク】

ヴィスク「そう、それでいい。そのまま」

SE 近づく足音

【マイク位置7 耳元で】

ヴィスク「今から、僕に何をされるかわかりますか？
純真無垢な君でも、さすがに想像がつきますよね？
ああ……こんなにふるえて、かわいそうに。
でも、きつと君は耐えきれぬ。大丈夫、僕に任せて。
【喋りながらデ IPPキスになだれ込む】」

【マイク位置1】

ヴィスク「ほら、自分から舌を絡めて……ん……ちゅ……
喉を絞めないで、唾液は全部飲む……
こぼしたらお仕置きですよ？　そう、はは、そう。上手
ああ……唇、赤くなっちゃいましたね。
口紅を塗ったみたいだ……」

【ヒロイン】「これでいいでしょ？ 早く元に戻して……！」

ヴィスク「うん？ はは、まさか。

これで終わりなわないでしょう。

キスされるだけだと思ってたんですか？

そうですね……上手にキスができたから、

ご褒美に、何をされるのか教えてあげましょう」

【マイク位置3】

ヴィスク「今から僕の舌と、唇と、指で、君の全身に触れるんです。

君は僕に触れられながら、どこがより強く感じるのか、

全部報告しなければならぬ」

【ヒロイン】「何それ……？ そんなの絶対嫌……！」

【マイク位置1】

ヴィスク「嫌？ 今、嫌って言いましたか？

つまり……僕に鞭で打ってほしい？」

【ヒロイン】「違う……そうじゃないけど……！」

ヴィスク「そうでしょう？ 鞭は嫌ですよね？

大丈夫、今の「嫌」は聞かなかったことにしてあげます。

ほら、服を脱がせますから、協力して。腕を上げて。

肩は動かせるでしょう？」

SE 衣擦れ

【マイク位置7】

ヴィスク「君がそうして素直にしていってくれば、

僕も君にひどいことをしないで済む。

ああ……綺麗だ……君はあの時と少しも変わらない……。

だけど今はあの頃と違って……【ヒロインの胸に触れる】

はは、こうしてちよつと胸に触れただけで、

泣きそうになる」

【マイク位置1】

ヴィスク「かわいいなあ。指先で転がすたびに、

子猫みたいに声を上げて……感じるんですか？

こうやって爪で引っかかるのと……

指でおし潰されるのと……」

ヴィスク「つまんで転がされるの、どれが一番好きですか？

答えないと、いつまでたってもやめてあげませんよ？
分からない？ そう……」

【マイク位置3 耳元で】

ヴィスク「じゃあ、舐めてほしい？」

SE もがく

ヴィスク「自分じゃ言えませんか？

なら僕が指示を出してあげますから。

君はそれに従うだけでいい。

「お願いヴィスク、舐めて、気持ちよくして」って、
言ってください」

SE 教鞭の音（セリフにかぶせるくらいの感じで）

【マイク位置1】

ヴィスク「言えない、じゃないでしょう？ ほら、言って。

鞭は嫌でしょう？ ほら、ほら……！」

【ヒロイン指示に従う】

ヴィスク「上手に言えましたね。じゃあ、ご褒美だ。」

【ここからヒロインの胸舐めながら】

ヴィスク「ああ、その声……気持ちいいですね？

そう、やっぱり君は……ちゅ……こうされたかったんだ

ほら、指でもいいじってあげる。

うん？ どうしたんですか、そんな風に腰を揺らして。

もどかしそうに、誘うみたい……」

【ヒロイン「そんなことしてない……！」】

ヴィスク「ふうん？ また嘘をつくんですね【舐めるのここまで】」

ヴィスク「君は本当に、救いようのない嘘つきだな。

そうやって純情ぶって、拒絶して見せて、

相手のせいにながら、本心では快楽を欲しがってる」

ヴィスク「……悪い子だ。

僕にされるお仕置きを期待してるんでしよう？

それとも、本当にわかっていないんですか？

困ったな……必要なのは、お仕置きよりも教育なのかも。
足を開きなさい」

【ヒロイン、泣き出す】

ヴィスク「泣けと指示した覚えはありませんよ。

何度とも言わせないでください。足を、開いて。

膝から上は動かせるでしょう？ ほら、早く！」

SE 教鞭

【マイク位置7 耳元で】

ヴィスク「次は本当に当てますよ？ 僕が本気か試してるんですか？」

【ヒロイン、泣きながら足を開く】

ヴィスク「まったく、君は学習しないな。

どうせ従うことになるのだから、

最初から言う通りにしていけば怖い思いもしないのに。

ああ……もしかして、怖い思いをしたいんですか？

違うなら、どうして——【ヒロインの濡れた秘部に触れる】」

SE 水音

【マイク位置1】

ヴィスク「こんなに濡らしてるんですか？ 少し触っただけで、

ほら、手のひらに垂れてくる。

好きでもない男に鞭で脅されて、キスされて、舐められて、
興奮したんですか？」

【ヒロイン「違う、違う……！」】

SE 激しめの水音

【指を激しく出し入れさせながら】

ヴィスク「違わないでしょう？ この音。聞こえますか？

君が僕に凌辱されて、はしたなく感じてる音だ。

ほら、足を閉じない。腰を引かない」

ヴィスク「素直な体ですね。君が何も言わなくても、どこで感じるのか、すぐに分かる。もつと奥まで、乱暴にかき回してほしい？ 指じゃ届かないところまで、挟ってぐちゃぐちゃにしてほしい？」

ヴィスク「でもダメです。今日是指だけで我慢して。

ん？ もうイキそうなんですか？ いいですよ、いつでも。ほら、目を開けて、ちゃんと僕を見ながらイってください。

舌を出して。キスしてあげますから。

ん、む……ちゅ、じゅる。ん、ん……。

ッ……。【唇噛まれる】」

ヴィスク「いった……！ ああ、大丈夫ですよ。

わざと噛んだんじゃないって、分かっていますから。

っはは……血が出るほど強く噛むなんて。

我を忘れるほど気持ちよかったです？」

【でろでろに甘やかす声で】

ヴィスク「よしよし……上手にイけましたね。

君の心臓、ドキドキしてる。

怖かった？ 恥ずかしかった？

本当に、よく頑張りましたね。

汗をかいたでしょう。体を拭いてあげますね。

大丈夫、動けない君の世話には慣れてますから」

ヴィスク「うん？ そうですね……完璧ではありませんでしたが、

手の感覚だけ戻しましたよか。

足の感覚は、次回の挑戦に持ち越しと言うことで」

【ヒロイン「……ありがとうございます、院長先生」】

ヴィスク「はい、どういたしまして。【頬にキス】」

■トラック8 お休み僕の眠り姫（10分程度）

監禁生活も一カ月目くらい。

ヒロインはもう、なんとなく脱走を諦めながら、唯々諾々と毎日を過ごしているが、ヴィスクはヒロインを疑い続けている。

SE ドアが閉まる音

SE 去って行く足音

【マイク位置 9】

ヴィスク「今来ていた男……誰ですか？——その本は？

さっきの男から受け取っていたでしょう」

SE 近づいてくる足音

SE 衣擦れ

【ヒロインの腕を掴んで引き寄せ、耳元で】

ヴィスク「その本、こっちに渡して。いい子だから」

SE 本をめくる音。

ヴィスク「ああ……やつぱり。ほら、メッセージカード付きだ。

君をこの家から連れ出したって書いてある。

応じるつもりだった？

君がここにきて一カ月……大人しくしてると思ったら。

僕から逃げ出すために、他の男を誘惑してたんですね。

残念ですよ、オーリ。少し君を信じかけていたのに、

こんなふうに裏切るなんて。

また、お仕置きが必要ですね【楽しそうに】

SE もがく

SE 荒々しい足音

SE どさつ

SE ベッド転む

SE 暴れる音

【マイク位置 1】

ヴィスク「しい、しい……！ ほら、暴れないで。

縄で縛られたいんですか？ それとも鞭で脅してほしい？

そうじゃないなら、大人しくしてた方がつらくないって、

いい加減学習できませんか？」

SE 服破く

【全身にキスしながら】

【マイクやや下から】

ヴィスク「触らせたんですか？ この体に。僕以外の男に触れさせた？
僕の目を盗んで？」

【ヒロイン「触らせてない！ そんなことしてない！ 信じて！」】

ヴィスク「ああ…それが信じられたら、どれほどいいか。
ちゅ…ん、ちゅ…ん：ほら、腕、首に回して。
足を開いて、そう、いい子だ…」

SE ベルトはずす

SE 衣擦れ

ヴィスク「もう、十分に濡れてますね。乱暴に組み敷かれて、
期待してたんですか？
それとも、あの男に触れられることを期待してた？」

SE 触れ合う水音

ヴィスク「だめですよ。まだ入れない。
こうして、浅いところで…君が欲しいと言うまで
焦らしてあげる。焦らされるの、好きでしょう？」

SE ゆっくりめの水音

ヴィスク「はあ…君のここ、早く中に欲しいって、
僕に絡みついてくる。食欲だな…
少しも我慢できないんですか？
ほら、だったらおねだりしてみせて。ねだり方はもう、
何度も教えてあるでしょう？
上手にできたら、すぐに奥まで入れてあげます。
一番深いところまで穢し尽くして、
他の誰かに抱かれるたびに僕を思い出すようにしてあげる」

【拒絶するヒロインに、冷笑を浮かべながら】

ヴィスク「こんなに濡らして、物欲しそうに腰を揺らしておきながら、
嫌だと言うんですか？ こんなことされたくないって？
誰がそんな上辺だけの拒絶を信じてくれるでしょうね？」

【マイク位置3 耳元で、脅しつけるように】
ヴィスク「少なくとも、僕は信じない」

ヴィスク「それを証拠に、ほら。少し腰を進めるだけで…

う、く… 【挿入。やや苦しげに】

あっけなく先端を飲み込んで、もつと奥にとうごめいてる。

抜いてほしい？ ん？ 黙ってたら分かりませんよ。

ほら、嫌ならちゃんと抵抗しないと。

ああ… 中の方、びくびくしてますね。

まさか、いったんですか？ 【嘲笑】浅く入れられただけで？

毎晩可愛がってあげてるのに、それじゃ足りない？

そんなに男の体が欲しかった？」

【ヒロイン、泣きながらもがく】

【マイク位置1 少し離れて】

ヴィスク「ああ、だめですね… おねだりはいつまでも

上手くならないな。

しょうがない… 僕も今日は余裕がない。

いじわるはこの位にして… つは、あ… 【奥まで挿入】。

ほら… 奥まで入った。

わかりますか？ 一番奥、届いてる。はあ、はあ… !」

SE ギッギッギッギ

ヴィスク「ああ、はあ… こんなに激しく締め付けて…

ずっといきっぱなしじゃないですか。

そんなに気持ちいい？ 奥を貫かれるのが？

それとも胸を触られるのが？ 舌を舐め合う

下品なキスが好きですか？

わからない、じゃないでしょう。ほら、舌出して」

【ここからキスハメ】

ヴィスク「ん、ん… ! ふ、う… ん、ん… ちゅ、ん… !

は、はあ… えぐってほしいんですね？

こうやって… ! ああ… はあ… !」

【キスハメここまで】

ヴィスク「またいった？ 呆れ果てた、淫乱ですね… ツ！

ほら、足… ちゃんと僕の腰に絡めて…

一番奥に注いであげますから。

いや？ やめて？ 許して？

はは… ! 今更遅い… 全部手遅れだ… !」

ヴィスク「君は僕の全部を受け入れるしかないんですよ。

君のこのお腹の奥に、僕たちの子供ができるまで、
毎晩気絶するまで注いであげる。

愛してる……愛してる、愛してる……！」

【マイク位置3】

ヴィスク「う、あ……ああ、出る、もう……ああ……！」

【ヒロインの頭ぎゅーつてする感じでフィニッシュ。

出したあと十秒くらい呼整える】

【余韻に浸り、放心状態のヒロインの髪を撫でながら】

ヴィスク「君はもう、この家から出られない……出してやらない。

君は僕のだ……僕だけの、大切な人……。

う、ふ……ひぐ、う……」

【泣きながら】

ヴィスク「ごめんなさい……

こんなふうになるつもりじゃなかった……！

どうか、僕を憎んで……世界の誰より、

僕の事を一番憎んでください。

僕は君を手放せない。

だからいつか、どうしても耐えられなくなったら、

僕を殺して、この家から逃げ出して。

大丈夫。きつと誰かが君を助けてくれるから。

僕じゃない誰かが。だけどそれまでは、その日まで——」

【マイク位置3 耳元で懇願】

ヴィスク「君の憎しみを、全部僕に下さい。僕の愛を全部君にあげるから。

うん……？ いいんですよ、意味なんて分からなくて。【泣き笑い】

ごめんなさい。急に泣いたりして、びっくりしたでしょう？

大丈夫、なんでもありません。

疲れたでしょう？ さあ、このまま眠って。

目が覚めたら、また全部元通りだ。——お休み、僕の眠り姫」

END